



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

アルジェリア：「カリフの兵士」がフランス人を誘拐、斬首を警告

9月21日夜（現地時間）、アルジェリア北東部のティーギー・ウズー県で、フランス人のヘルベ・ピエール・グーデル氏（55歳）が誘拐される事件が発生した。翌22日、「アルジェリアの地のカリフの兵士」を名乗る集団が、インターネット上で同氏を誘拐したことを認める映像を発表し、フランスが「イスラーム国」に対する攻撃を24時間以内に停止しなければグーデル氏を斬首すると警告した。フランスは19日にイラクのモスル北部を空爆している。

同人は山岳ガイドで、アルジェリア人と共に山岳地帯のティーギー・ウズー県アクビールを訪問していた。仏外務省も、22日、誘拐されたフランス人がグーデル氏であることを確認し、ファビウス外相は人質解放のためあらゆる努力を尽くすと述べた。

グーデル氏を拉致したとされる「アルジェリアの地のカリフの兵士」なる組織は、2週間ほど前に「イスラーム的マグリブのアル=カーイダ」（AQIM）から分離・結成を発表したばかりのイスラーム過激派とみられる。9月12～13日にインターネット上に出回った結成声明によれば、AQIMが「正しい道」から外れたことを批判した上で同組織からの分離を発表し、「カリフの兵士」は「イスラーム国」の司令官アブー・バクル・バグダーディーに忠誠を誓うと表明していた。

評価

今回の事件は、21日に発表された「イスラーム国」公式報道官アブー・ムハンマド・アドナーニーの演説に直接反応したものとされる。同声明は、欧米諸国があらゆる地でムスリムを迫害しているとして、「イスラーム国の支援者」や「カリフに忠誠を誓った者」に向けて、イスラーム国を防衛するため、どこであれ自分たちがいる場所で欧米諸国の「不信仰者」を民間人であれ軍人であれ殺せと呼びかけた。

以上から2つのことを指摘できる。第一に、今回の事件は、「イスラーム国」は距離を越えて影響力を持ちうることを象徴している。イラクとシリアでの「イスラーム国」の行為・呼びかけが、遠く離れたアルジェリアの過激派を刺激し、フランス人を人質に取るという行動に向かわせた。中東アラブ地域やその他地域で活動するイスラーム過激派諸団体が、「イスラーム国」にどのような態度を示しているか、また示していくか、注視する必要がある。

第二に、23日に米国・一部アラブ諸国によるシリア空爆が開始されたことにより、「イスラーム国」及びシンパ組織がシリア空爆に参加した国々の市民を攻撃対象にする可能性がある。これまで標的となってきた欧米諸国の市民だけでなく、バハレーン、ヨルダン、サウジアラビア、カタール、UAEの市民が攻撃の標的となる可能性もあるだろう。日本は「イスラーム国」対策において資金援助にとどめているが、過激派から欧米諸国の「支援者」とみなされる可能性

は否定できない。外国在住の邦人及び邦人権益の安全対策を十分に確保する必要がある。

(イスラーム過激派モニター班)

---

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799